

## 日韓翻訳に見られる翻訳規範の変化と異文化コミュニケーション -川端康成『雪国』の翻訳を題材に-

著者	Kim Hyun Ah
号	10
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	国博第131号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/59210">http://hdl.handle.net/10097/59210</a>

キム ヒョナ  
KIM HYUN AH

学位の種類	博士（国際文化）
学位記番号	国博 第 131 号
学位授与年月日	平成24年 3月27日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期 3 年の課程） 国際文化交流論専攻
学位論文題目	日韓翻訳に見られる翻訳規範の変化と異文化コミュニケーション －川端康成『雪国』の翻訳を題材に－
論文審査委員	（主査） 准教授 中本武志 教授 宮本正夫 教授 小野尚之 准教授 ナロック ハイコ 准教授 佐野正人

## 論文内容の要旨

### 第 1 章 はじめに

翻訳という行為は二つの言語と文化の存在を前提として行われるため、翻訳時に生じる諸問題は言語内の要因はもとより、異文化間の差異からも発生する。よって、翻訳者には、二つの異なる言語と文化の間で行われるコミュニケーション行為を成功させるための、能動的かつ創造的な異文化の仲裁という役割を果たすことが求められる。

とはいえ、翻訳文に表れている翻訳者の個々の選択も、翻訳者個人が生きている特定の時代や社会、文化の制約を受けており、また二つの異なる文化や言語の特性からも影響されているため、翻訳者の選択が必ずしも翻訳者一人だけのものとは言えない。

つまり、ある社会にはその社会の社会的、文化的、歴史的状況による「翻訳規範（translation norms）」が存在し、その規範が翻訳文に表れる等価（equivalence）のタイプと程度を決めるのである。このような翻訳規範は翻訳者や出版社、評論家など様々な人々が参加するたゆまぬ妥協の過程であり、また時間と空間によっても変化する（Toury 1995:61）。

そこで、本研究では、日本語の文学テキストを原文とする複数の韓国語訳を1960年代から最近のものまで通時的に記述分析することで、以下の点を解明することを研究課題とする。

- 1) どのような翻訳方法が用いられているのか、
- 2) 時間の流れと共にその方法に変化が見られるのか、
- 3) 変化があるとしたらどの時期に起きているのか、

さらにその結果を基に、

- 1) 日本文学の翻訳にはどのような規範が作用してきたのか、
- 2) その規範に変化が見られたとしたらどの時期に起きているのか、
- 3) 規範の変化と異文化コミュニケーションとの関連性を見出すことはできるのか、

という問いに答えることが本論文の目的である。

## 第2章 理論的枠組み

### 2.1 システム理論

#### 2.1.1 多元システム理論

多元システム理論 (Polysystem Theory) では、翻訳文学は TL (Target Language) の社会・文化・文学・歴史システムの一部として作動するもう一つのシステムであり、翻訳文学と TL の文学は TL の文学システムのなかで、より優位な地位に立つために常に競争し合っていると言う (Even-Zohar 1978/2000)。

多元システムは異質なシステムが階層的に結合した一つの結合体であり、それらシステム間の相互作用によって、多元システム全般に渡り持続的かつ動態的進化の過程が起こる。Even-Zohar (1978/2000:193-5) は多元システムの要は「動態的進化の過程」にあると強調し、そのため翻訳文学の地位も流動的であるとしている。もし翻訳文学が一次的地位につけば、翻訳文学は多元システムの中心となり、革新的な新文芸思潮などの導入を通じて TL での新たな文学類型の形成に貢献する。これに対し、翻訳文学が二次的地位に置かれる場合、翻訳文学は周辺システムになり、中心システムに大きな影響を与えられず、TL の慣習や文学規範を遵守することで、むしろ保守的要素を保つことになる。

Even-Zohar (1978/2000:195-6) によると、翻訳文学は二次的地位にあるのが普通だが、翻訳文学内にもまた階層が存在するため、起点テキスト (Source Text=ST、原文) の文化圏によってシステム内でその地位が異なる場合がある。

Even-Zohar (1978/2000:196-7) はまた、翻訳文学の地位が翻訳の戦略を左右すると主張する。翻訳文学が一次的地位を占めると、翻訳者は TL の文学モデルに従わない ST に「適切性 (adequacy)」の高い目標テキスト (Target Text=TT、翻訳文) を生産し、TL 文学に新たな文学

モデルを生み出す。一方、翻訳文学が二次的地位にある場合、翻訳者はSTに影響されず、TLの文学モデルに従った「受容性 (acceptability)」の高いTTを生み出すことになる。

### 2.1.2 記述的翻訳研究

Toury (1995:54-5) は、規範について、「あるコミュニティが共有している一般的価値ないし考え—何が正しく、何が誤りか、何が適切で何が不適切か—を、特定の状況にふさわしく、適用可能な作業指示に翻訳したもの」と述べ、規範は「同一タイプの頻出する状況で見られる行動の規則性」を意味し、ある文化、社会、時代だけに該当する社会文化的制約であり、個人は教育と社会化のプロセスから規範を獲得するとしている。

Toury (1995:56-61) はまた、規範を三つのタイプに分けて説明している。まず、初期規範 (initial norm) はSTとTTの間で行われる翻訳者の一般的な選択を示す。翻訳者はSTの規範に従う「適切」な翻訳を行うこともあり、TTの規範に従う「受容可能」な翻訳を行うこともできる。次に、予備的規範 (preliminary norms) は、どの言語・文化圏のSTを選択するかを決める翻訳政策と重訳の許容などに関する翻訳の直接性がそれに当たる。最後に、運用規範 (operational norms) は、テキストの省略や位置変更などに関わる基質的規範 (matricial norms) とテキストの語彙項目や句、文体的特徴などの言語要素の選択に関わるテキスト・言語的規範 (textual-linguistic norms) からなる。

Toury (1995:36-9) は多元システム理論をより発展させた記述的翻訳研究 (Descriptive Translation Studies) の研究方法として、次の3段階の方法論を示している。まず、TLの社会・文化システム内でのTTの地位に注目する。そして、STとTTを比較し、異同の有無を調べ、STとTTの間で対応する部分の関係を究明し、その根底に置かれている概念を探る。最後に、得られた結果を基に、それが翻訳の意思決定に何を含意しているのかを導き出す。それに加えて、上記の1、2段階を繰り返してコーパスを拡大し、ジャンルや時期、著者などによる翻訳の特徴について記述することで、各類型別に翻訳規範を究明し、ひいては翻訳行為に対する一般法則を示すという最終目標を達成することができるという。

## 2.2 自国化翻訳と異国化翻訳

自国化 (domestication) 翻訳とは、TTの読者には異国的で見慣れないSTの言語・文化的要素をTTの文化と慣習に合わせて翻訳する方法で、TTの異質感を最小限にして読者の理解を高める翻訳戦略である。これに対し、異国化 (foreignization) 翻訳とは、STの異国的要素をTTの文化の言語的・テキスト的慣行に従わない不自然な翻訳やSTの文化をそのまま残すことでTTの異質感を最大化する翻訳戦略である (Venuti 1995/2008<sup>2</sup>:15)。

なお、藤濤（2005:32）はSTに含まれる形式・内容・効果のうちどの要素を伝え、何を変更したかという視点から、「翻訳方法の一覧」を提示し、そのうち、移植、音訳、借用翻訳、逐語訳をST中心の異化的効果を生かす方法、そしてパラフレーズ、同化、省略、加筆をTT中心の同化的効果を優先する方法、訳注などの解説はどちらにも用いられる可能性がある方法として挙げ、それぞれ異国化翻訳方法と自国化翻訳方法に分類している。

### 第3章 先行研究

#### 3.1 韓国現代翻訳文学史に影響したシステム

チョン（2004:178）は多元システム理論に基づき、1945年から1985年までの韓国の現代翻訳文学史の流れに影響を与えたシステムとして、1. 「反共」という国の政治的理念による、主に西欧の白色文学への偏重、2. 巨匠やノーベル文学賞受賞者の作品紹介が中心、3. 出版社のマーケティング戦略による全集類と文庫版の氾濫、4. 読者の選好度、を挙げ、それらのシステムが互いに競い合いながらTTの選定に影響を及ぼすという動態的進化の過程を繰り返していると報告している。

#### 3.2 日本文学の翻訳

金（2008:29-49）によると、1950年代は7冊に過ぎなかった日本文学の翻訳は、1960年代に入ってから1965年の「日韓国交正常化」などの政治的影響もあり、日本文学のブームと共に300作品を越えた。また、1970年代からは純文学に加え日本の大衆小説が活発に翻訳されはじめ、1980年代に入ってからその勢いは止まらず、日本文学の翻訳は激増の一途を辿ることになる。そして、1990年代からは村上春樹の登場と共にいわゆる「ハルキブーム」が始まり、未だ韓国社会に大きな影響を与えており、翻訳作品も1000点を超えている。

なお、韓国の文学システムにおける日本文学の位置は、韓国文学より優位を占めているとは言えないが、韓国文学に欠けているところを満たすような形で、当時の一流作家らによって翻訳されはじめた点、そして日本文学が本格的に流入した1960年代から今まで、英米文学など主流を占めている文化圏の翻訳文学並みの占有率を保ち続けており、しかもここ数年は英米文学を追い越して最も多く翻訳される国の文学になっている点、さらに1960年代と1990年代の日本文学ブームを通じて韓国文学の節目ごとに直接・間接に大きな影響を与えてきた点から、韓国の翻訳文学システム内で一次的地位を占めていると言える。

### 第4章 研究方法

本研究では、Toury（1995）の記述的翻訳研究の3段階の方法論と Lambert and van Gorp（1985）

の4段階の分析方法を基にして、次の3段階の分析の枠組みを設定し分析を行った。

- 1) 予備的データの分析：タイトルや著者及び翻訳者の名前、序文、著者及び翻訳者の紹介、製本方式、抄訳か全訳かなどを分析
- 2) マクロ構造の分析：テキストの分け方、タイトルと章立て、パッセージの省略や再配置、追加、訳注などを分析
- 3) ミクロ構造の分析：言語の様々なレベルでのシフト、つまり語彙項目や句、文体的特徴などを分析

上記の3段階を総合的に分析・考察し、各TTに作用している翻訳規範を究明する。なお、ミクロ構造の具体的な分析方法及び手順は以下のとおりである。

まず、STと韓国語訳(Korean Text=KT)、英語訳(English Text=ET)の全文を比較対照し、(1)呼称・人称ダイクシス、(2)交感的言語使用・文体、(3)社会文化的慣習、(4)非言語コミュニケーション、(5)慣用表現、(6)文化関連語彙、の六つのカテゴリー別にSTとKT、ETを写像して「対応ペア」を生み出す。

次に、各カテゴリー別に「対応ペア」を比較し、藤濤(2005)の「翻訳方法の一覧」を基準にそれぞれの翻訳方法を検討する。そのうち、移植、音訳、借用翻訳、逐語訳、解説は異国化方法として分類し、パラフレーズ、同化、省略、加筆は自国化方法と分類する。

最後に、上記の分析結果を基に、1)各々のKTとETにどのような翻訳規範が見られるのか、またKTとETの間に違いは見られるのか、2)各カテゴリー別の特徴と呼べるものがあるか、3)KTは時間の流れと共に変化しているのか、また変化しているとすればその時期はいつなのか、4)翻訳規範の変化と異文化コミュニケーションとの関連性を見出すことはできるのか、という諸問題を多元システム理論の観点から考察する。

なお、本研究では分析対象として川端康成の『雪国』を取り上げ、1963年から2002年までそれぞれ異なる翻訳者によって翻訳された9冊の韓国語訳とその対照群として『雪国』の英語訳を用いて分析を行う。

## 第5章 予備的データの分析

タイトルの翻訳にはKT、ET共に異国化方法が取られており、1960年代のKTとETに訳者紹介がない点を除いては、時代別の特徴や流れなどは見られない。ただし、KTの場合1960～70年代は縦書きの右綴じだった出版物の製本方式が、1980年代に入ってから横書きの左綴じへと変わり、その転換が翻訳テキストの構成にも大きな変化をもたらしている。

## 第6章 マクロ構造の分析

まず、テキストの章立てと分け方については、KTではSTとほぼ同じ形で翻訳が行われているのに対して、ETではSTより細かくテキストを分けて、読みやすい翻訳になっている。

また、パッセージの追加、省略、再配置などの操作はETでより積極的に行われており、KTでも最近では、TTよりの翻訳の傾向が見られる。さらに、KTでの文章符号の使い方も製本方式の変化と共に1980年代からはTLの規則に従った方向へと変わっている。

最後に、訳注を付ける方式や使用回数、使用箇所などに統一性や基準のようなものは見られず、時代別の傾向とそれに伴う翻訳方略の変化を見出すことはできなかった。ただ、訳注の付け方は個別TT内でパッセージの操作や文章符号の使い方と共にTTのマクロ構造としての方向性は保持していると思われる。

## 第7章 ミクロ構造の分析

### 7.1 呼称・人称ダイクシス

KT、ET共に自国化翻訳が行われているが、KTではSTの人称ダイクシスがそのまま対応させられるところが多く、ETでは日本語と英語のコード化の違いにより対応語が存在しないため、方法としては逐語訳が最も多く取られており、カテゴリー全体としては異国化傾向が強く表れている。また、KTにおける時代別の特徴や全般的な変化の方向性と言えるようなものは見られなかった。

(1) [ST] 「(…) 私は知りませんが、そういう噂でございますね。」(p.59)

[KT 1] ∅

[KT 2] 저 (わたくし)

[KT 3] 나 (私)

[KT 4] 난 (私は)

[KT 5] 나 (私)

[KT 6] 나 (私)

[KT 7] 난 (私は)

[KT 8] 난 (私は)

[KT 9] 저 (わたくし)

[ET] “So they say. I don't really know, but that's the rumor.”

表7-1 呼称・人称ダイクシスの分析結果

	KT 1	KT 2	KT 3	KT 4	KT 5	KT 6	KT 7	KT 8	KT 9	ET
自国化	248	128	199	102	133	168	197	124	191	214
異国化	273	393	322	419	388	353	324	397	330	307
合計	521	521	521	521	521	521	521	521	521	521

## 7.2 交感的言語使用・文体

KT、ET 共にその具体的な意味と交感的機能を伝える自国化翻訳が明らかで、特に ET ではその傾向がいっそう強く、KT でも KT としてより自然な方向へ変わっている。また、このカテゴリーの KT は全体として自国化傾向があり、自国化翻訳の中でもまず自国化翻訳から始まり、異国化翻訳の時代を経て、再び自国化翻訳へと変化する動きを見せている。

(2) [ST] 「こんなもの、お一ついかがですか。(…)」(p.87)

[KT 1] 이런거 한개 어떠십니까。(こんな-もの 一-個 いかかですか)

[KT 2] 이런 것 어떻습니까。(こんな もの いかかですか)

[KT 3] 이거 한 개 어떠십니까。(これ 一 個 いかかですか)

[KT 4] 이거 하나 드시죠。(これ ひとつ 召し上がってください)

[KT 5] 이것 하나 드시겠어요?(これ ひとつ 召し上がりますか)

[KT 6] 이거 하나 드세요。(これ ひとつ 召し上がってください)

[KT 7] 이것 하나, 어떻습니까?(これ ひとつ、いかがですか)

[KT 8] 이것 하나, 어떠세요?(これ ひとつ、いかがですか)

[KT 9] 이거 하나 드시죠。(これ ひとつ 召し上がってください)

[ET] “Won't you have one ?” he asked Shimamura. “You really must have one. (…)”

表7-2 交感的言語使用・文体の分析結果

	KT 1	KT 2	KT 3	KT 4	KT 5	KT 6	KT 7	KT 8	KT 9	ET
自国化	65	55	58	52	58	57	49	65	70	94
異国化	37	47	44	50	44	45	53	37	32	8
合計	102	102	102	102	102	102	102	102	102	102

## 7.3 社会文化的慣習

ST と社会文化的慣習が共通しているところが多い KT では逐語訳のような異国化方法が主に取

られており、STの異質な慣習は解説や加筆で訳している。一方、ETでは加筆やパラフレーズで情報を付け加えて訳すか、省略するという異国化翻訳の方法が目立つ。また、このカテゴリーのKTは全体として異国化傾向があるが、まず自国化から始まり、その後異国化方向へと変化している。

(3) [ST] 「廊下が鳴るので恥かしいわ。(…)」(p.126)

[KT 1] 복도가 헐어서 삐걱 소리를 내기 때문에 이 방에 올 때마다 부끄러워요.

廊下-가古くてきしむ音-を出すためこの部屋-に来る度に恥かしいわ

[KT 2] 마루가 삐걱거리 부끄러워요.

床-가きしんで恥かしいわ

[KT 3] 복도가 낡아 삐걱 소리가 나기 때문에 이 방에 올 때마다 부끄러워요.

廊下-가古くてきしむ音-가出るためこの部屋-に来る度に恥かしいわ

[KT 4] 복도가 울려서 창피해요.

廊下-가響いて恥かしいわ

[KT 5] 복도가 울려서 부끄러워요.

廊下-가響いて恥かしいわ

[KT 6] 복도가 울려서 부끄러워요.

廊下-가響いて恥かしいわ

[KT 7] 복도가 삐걱거리서 부끄러워요.

廊下-가きしんで恥かしいわ

[KT 8] 복도가 울려서 부끄러워요.

廊下-가響いて恥かしいわ

[KT 9] 복도가 삐걱거리 창피해요.

廊下-가きしんで恥かしいわ

[ET] The floor always creaks when I come down the hall.

表7-3 社会文化的慣習の分析結果

	KT 1	KT 2	KT 3	KT 4	KT 5	KT 6	KT 7	KT 8	KT 9	ET
自国化	15	8	10	7	8	8	8	9	9	20
異国化	8	15	13	16	15	15	15	14	14	3
合計	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23

#### 7.4 非言語コミュニケーション

KT、ET 共に自国化翻訳の傾向が強い。ST と類似した表現が多い KT では、逐語訳と同化、パラフレーズのような方法が取られているが、次第に逐語訳から同化やパラフレーズなどへと翻訳方法が変化していく傾向が見られる。一方の ET ではパラフレーズを中心に省略、そして稀に逐語訳が使われている。また、このカテゴリーの KT は全体として自国化傾向を見せており、最初の異国化翻訳から次第に自国化翻訳へと変化している。

(4) [ST] 足が立たないので、体をごろんごろん転がして、 (p.42)

[KT 1] 발로는 일어설 수가 없어서

足-では立つ こと-ができなくて

[KT 2] 다리로 설 수 없으니까

足-で立つ こと できなくて

[KT 3] 바로 설 수가 없어서

真っすぐに立つ こと-ができなくて

[KT 4] 다리가 서지질 않아서

足-が立てられなくて

[KT 5] 다리로 설 수가 없어

足-で立つ こと-ができず

[KT 6] 다리에 힘이 없어 일어서지를 못하고

足-に力-がなく立てられなくて

[KT 7] 다리에 맥이 빠져

足-に脈-が抜けて

[KT 8] 다리가 제대로 말을 안 들어

足-がちゃんと話-をない聞か

[KT 9] 똑바로 몸을 가누지 못해

真っすぐに体-を支えられなくて

[ET] And, unable to stand, she had rolled from side to side.

表7-4 非言語コミュニケーションの分析結果

	KT 1	KT 2	KT 3	KT 4	KT 5	KT 6	KT 7	KT 8	KT 9	ET
自国化	54	41	59	53	54	62	60	62	68	77
異国化	36	49	31	37	36	28	30	28	22	13
合計	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90

### 7.5 慣用表現

KT、ET 共に自国化翻訳の傾向が強く見られる。KT ではST と形態と意味が類似しており、同じように使われている慣用表現は主に逐語訳で、またST にしか存在しない表現は同化やパラフレーズで訳しているが、時には例 (5) のように TL としては不自然な ST の逐語訳もある。一方、ET ではほとんどの場合、ST の慣用表現をパラフレーズで説明している。

- (5) [ST] 山の感傷が女の上にまで尾をひいて来た。(p.19)
- [KT 1] 꼬리를 끌고 왔다 (尾-を ひいて 来た)
- [KT 2] 꼬리를 끌어 왔다 (尾-を ひいて 来た)
- [KT 3] 꼬리를 끌고 왔다 (尾-を ひいて 来た)
- [KT 4] 꼬리를 끌고 왔다 (尾-を ひいて 来た)
- [KT 5] 꼬리를 물고 왔다 (尾-を くわえて 来た)
- [KT 6] 꼬리를 끌고 왔던 것이다 (尾-を ひいて 来た のだ)
- [KT 7] 꼬리를 끌고 왔다 (尾-を ひいて 来た)
- [KT 8] 꼬리를 물어 왔다 (尾-を くわえて 来た)
- [KT 9] 꼬리를 늘어뜨렸다 (尾-を 垂らした)
- [ET] His response to the mountains had extended itself to cover her.

表7-5 慣用表現の分析結果

	KT 1	KT 2	KT 3	KT 4	KT 5	KT 6	KT 7	KT 8	KT 9	ET
自国化	39	39	40	39	41	39	39	41	39	46
異国化	8	8	7	8	6	8	8	6	8	1
合計	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47

### 7.6 文化関連語彙

KT では音訳、解説のような異国化方法がより多く使われているのに対し、ET ではパラフレー

ズや省略などの自国化方法が目立つ。なお、KTの文化関連語彙の翻訳では、ST文化との距離が近いがために、かえってSTの異化的要素がTTに伝えられ難くなっていることが注目される。また、このカテゴリーのKTは全体として異国化傾向があるが、最初の自国化翻訳から異国化翻訳へと変わり、そして再び自国化翻訳の方向に動いている。

- (6) [ST] 女は裾を取って立ち上った。黒紋附を着ていた。(p.87)
- [KT 1] 가문 (家紋) 이 붙은 검정예복  
家紋-が 附いた 黒い-礼服
- [KT 2] 검은 예복 (黒い 礼服)
- [KT 3] 가문 (家紋) 이 붙은 검정예복  
家紋-가 附いた 黒い-礼服
- [KT 4] 검은 문쓰키 (紋附) ① (黒い 紋附)  
① 한 집안의 문장 (紋章) 인 가문 (家紋) 을 넣어 만든 일본 예복。  
(一つの家門の紋章の家紋を入れて作った日本の礼服。)
- [KT 5] 검은 예복 (黒い 礼服)
- [KT 6] 가문 (家紋) 이 박힌 검정 예복인 구로문쓰끼 (黒紋付)  
家紋-가 刷られた 黒い 礼服-의 黒紋附
- [KT 7] 검은 문장의 옷 (黒い 紋章-의 服)
- [KT 8] 구로문쓰키 (黒紋付) (黒紋附)
- [KT 9] 검정 예복 (黒い 礼服)
- [ET] Her cloak was a formal black.

表7-6 文化関連語彙の分析結果

	KT 1	KT 2	KT 3	KT 4	KT 5	KT 6	KT 7	KT 8	KT 9	ET
自国化	64	65	63	46	58	54	51	54	58	97
異国化	59	58	60	77	65	69	72	69	65	26
合計	123	123	123	123	123	123	123	123	123	123

## 第8章 おわりに

### 1) 日本文学の翻訳に作用した規範

まずKTでは、マクロ構造の構成及びミクロ構造の翻訳においても主に異国化方法が用いられており、全体として異国化翻訳の傾向が強い。これに対し、ETではタイトルは借用翻訳して異国化

しているが、テキストの構成などマクロ構造の積極的な操作が見られ、ミクロ構造の翻訳にも自国化方法が主として使われているなど、自国化翻訳の傾向が明らかである。

## 2) 翻訳規範に変化が見られた時期

KT では、ST の影響が強かった1960-70年代の KT に比べ、製本方式が変わった1980年代からは、テキストの構成や文章符号の使い方などで変化が見えはじめ、1990年代の KT からはパッセージの再構成などにも KT より操作が行われているなど、異国化翻訳から自国化翻訳へ徐々に転換したことがうかがえる。

特にミクロ構造の翻訳においては、異国化傾向の中でも、自国化から異国化へ、そして再び自国化へ戻る動きを見せているが、1960年代に初めて翻訳されたとき読者の理解を高めるために用いられた自国化に近い方法が、ノーベル賞の受賞でさらに強化された ST の地位の影響で異国化へ近づき、その後大きな変化はなかったものの、1990年代以後の日本文化の本格的な流入の影響により、自国化へと揺り戻しがあったと考えられる。

## 3) 翻訳規範に変化と異文化コミュニケーションとの関連性

韓国における日本文学の受け入れには、大きく1960年代の第一次日本文学ブームと1990年代の第二次日本文学ブームという転機があるが、KT の翻訳は異国化翻訳という全般的な流れの中で、第一次ブームから第二次ブームまでの間はほぼ翻訳規範の変化がない。

しかし、2002年に翻訳された KT 9 では再び自国化の傾向を見せているように、日本文学の翻訳規範にもようやく変化が見られ始めた。その原因として1998年に実行された日本大衆文化の開放とそれに伴う急激な文化交流の拡大が挙げられる。

文 (2008:195-6) が指摘しているように、2000年代に入り、日本文学は第三次ブーム期と言えるほどその勢いを増しているが、実際の翻訳においても自国化翻訳の傾向が急速に進んでいると言う (李2008:149)。つまり、1960年代の第一次ブームから1990年代の第二次ブームまではほぼ変化のなかった翻訳規範が、第二次ブームから2000年代に始まった第三次ブームの間ではすでに変化を見せており、異文化コミュニケーションの拡大がもたらした翻訳規範の変化がもはや翻訳テキストにも表れていると考えられる。

なお、本研究では第三次ブーム後に翻訳されたテキストで自国化翻訳がどのレベルまで進んでいるのかを示すことはできなかったが、今後実際の TT の分析を通じて、翻訳規範の変化を検討する必要がある。なぜなら、日本文学の場合、第三次ブーム以来、韓国の出版市場で占有率・販売率共に一次的地位に向かっているにもかかわらず、その翻訳傾向は自国化翻訳へ進んでおり、多元システム理論との不一致を見せているためである。

もちろん、日本文学が韓国の文学システムの中で韓国文学を越えて一次的地位を占めているとは言い難いが、もし日本文学の流入がさらに拡大し、一次的地位に近づけば、翻訳規範がST中心の異国化傾向へ変わるのだろうか。それともシステムを動かす別の要因が存在するのだろうか。今後はこうした面に着目した研究に取り組みたいと考えている。

### 【参考文献】

- Even-Zohar, I. (1978/2000) 'The position of translated literature within the literary polysystem.'  
In L. Venuti (ed.) *The Translation Studies Reader*. London: Routledge. 192-197.
- Lambert, J. & van Gorp, H. (1985) 'On Describing Translations', In Hermans (ed.) *The Manipulation of Literature: Studies in Literary Translation*, Beckenham: Croom Helm. 42-53.
- Toury, G. (1995) *Descriptive Translation Studies and beyond*. Amsterdam: John Benjamins.
- Venuti, L. (1995/2008<sup>2</sup>) *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. London: Routledge.
- 藤濤文子 (2005) 「日独翻訳にみる異文化コミュニケーション行為 - 『ノルウェイの森』の独語訳分析」『ドイツ文学論集』第34号、31-50.
- 文ヨンジュ (2008) 「일본소설의 국내 번역출판 현황과 특성에 관한 통사적 고찰 (日本小説の国内翻訳出版の現況と特性に関する通時的考察)」『韓国出版学研究』第34卷 第1号、189-219.
- 尹相仁・金根成・姜宇源庸・李漢正 (2008) 『일본문학 번역 60년 - 현황과 분석 (日本文学翻訳 60年 - 現況と分析)』ソミョン出版
- チョン・ヒョンジュ (2004) 「다중체계 이론과 한국 현대번역문학사 (多重体系理論と韓国現代 翻訳文学史)」『翻訳学研究』第5卷1号、167-182.

### 【分析テキスト】

- 川端康成 (2006) 『雪国』(改版) 新潮文庫
- 川端康成 (1963) 『雪國』(日本文学選集5) 金龍濟訳 青雲社
- 川端康成 (1969) 『雪國』(川端康成全集1) 金世煥訳 新丘文化社
- 川端康成 (1974) 『雪国』(世界文学全集) 柳呈訳 主婦生活社
- 川端康成 (1977) 『雪國』張昶龍訳 文藝出版社
- 川端康成 (1985) 『설국 (雪国)』(汎友サルビア文庫105) 金ジンウク訳 汎友社
- 川端康成 (1988) 『설국 (雪国)』(三星版世界文学全集49) 閔丙山訳 三星出版社
- 川端康成 (1991) 『설국 (雪国)』(グリーンブックス90) ユ・スンヒュ訳 青木社
- 川端康成 (1995) 『설국 (雪国)』(我が時代の世界文学43) ハン・ヨンスン訳 啓蒙社

川端康成 (2002) 『설국 (雪国)』 (世界文学全集61) ユ・スクジャ訳 民音社

Kawabata, Yasunari. (1996) *Snow Country*. trl. by Edward G. Seidensticker. New York: Vintage International.

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語から韓国語への翻訳に見られる翻訳規範と異文化コミュニケーションとの関連性に対し、社会的・文化的・歴史的コンテキストの観点から翻訳を考察した研究である。

理論的には多元システム理論と記述的翻訳研究を基盤に据えることで、翻訳文学とは原文と等価な孤立したテキストではなく、大きな文化システムの一部であり、そのシステムの中で互いに優位を占めるための競争を繰り返していることを明らかにした。

本研究を成功させた鍵は、韓国文化に大きな影響を与える日本文学の中でも、とりわけ一次的地位を確保している川端康成の『雪国』をとりあげたこと、そして翻訳の「自国化」傾向と「異国化」傾向という規範に焦点を絞ったことにある。

『雪国』は1960年以降、毎年のように多数の翻訳者によって訳されているため、日本文学の翻訳に働いている規範の変化を通時的に記述分析する本研究には最適のテキストである。また、本研究では韓国語訳の対照群として『雪国』の英語訳も分析し、原文が二次的地位にあるアングロ・アメリカ文化圏との対比によって、その特徴をはっきりと浮かび上がらせている。

規範としての「自国化」と「異国化」とは、原文の異国的な要素を減らそうとする文化的圧力と、そのまま受け入れようとする翻訳ポリシーの違いをいう。本論文では、右閉じか左閉じかという製本方式などに見られる予備的データ (第5章) から始まり、文章記号や訳注の付けかたなどのマクロ構造 (第6章)、さらに呼称や人称、非言語コミュニケーション、慣用句、固有名詞・伝統・習慣・度量衡を含む文化関連語彙などのミクロ構造 (第7章) を詳細に分析することにより、「異国化」規範が「自国化」規範に取って代われ、さらにまた「異国化」に回帰していく様子を、豊富な具体例の統計処理を通して、客観的・科学的に証明することができた。

広範な先行研究を十分に咀嚼した上で確立された本研究の手法は、非常に独創的であると同時に堅実でもあり、他の翻訳に応用することによって今回得られた結果を検証し、さらには「自国化」から「異国化」へ進むヨーロッパの翻訳規範との違いも、説明することが期待される。

以上の成果は、本論文執筆者が自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士 (国際文化) の学位論文として合格と認める。